

風のように



甘木教会

主任牧師：白川道生 牧会委嘱牧師：竹田孝一

5:29 ペトロとほかの使徒たちは答えた。「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません。」 使徒言行録5：29
1:8 神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」 ヨハネ黙示録1：8
20:29 イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

ヨハネによる福音書20：29

【説教要旨】 信じる幸い

私は、引退して2年目です。46年間の牧会生活に繋がった方々へ感謝する日々でいます。繋がった先輩、同輩の牧師から、宣教に挑戦していく道を与えられてきています。先輩に盲目の牧師、緒方一誠牧師、石松量蔵牧師がいました。このお二人は、今日のみ言葉、「イエスはトマスに言われた。『わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。』」とあるように、見ないでイエス・キリストを信じたから人の苦しみが見え、最後まで福音に忠実に宣教をなさったという証しをしてくださいました。

「格好よくいきられない人間のみじめさに直面し、トマスの絶望は深められます。弟子たち全員がイエスを捨てて、逃げてしまったのです。それは、トマスにもっともっと深い絶望を与えました。避けられない死を格好よく受け入れることができない、弱い弱い人間……。

トマスが、他の弟子たちから離れていた気持ちもわかるような気がします。イエスを捨ててしまった自分を含めた人間全体に対するあきらめと絶望という深いやみの中にのめりこんでいったトマス、人間不信にな

ってしまったトマスの姿は、・・・」① トマスの姿は、また私たちの姿ではないでしょうか。だから、この復活の物語に私たちは強く共感し、惹かれるのではないのでしょうか。緒方牧師は直接お会いしましたが、石松牧師について諸先輩、またブラジルの時代に先生のヘルパーをされていた親戚の婦人から話を聞いていました。羽村教会70年史を作る時に石松牧師の本「盲目の恩寵」と出会いました。

「私の魂はささやかな庵の中に蹲(うずくま)っているようなものであった。そして自分の周囲には幽(かす)かな星の光さえも感ずることはできないのであった。時としてはおそろしい魔の唸り声にこの魂は戦慄したのだ。・・・しかし夜はいつ明けそうにも思われなかった」②とあるように絶望と深い闇がありました。

しかし、神は絶望と深い闇の中に私たちをそのままに置いておられませんでした。

「盲目という道を通して、私を救いたもうた。更に適切に言えば、私自身の盲目によって神のみ心に叶うたのかもしれない」と言われた石松牧師を夜はいつ明けそうもない絶望と深い闇からイエスさまは救い出したのです。盲目という見えないということを信仰によってあらゆることを判断でき、見えるようにしてくださったのです。見ないのに信じる人は、幸いであるという喜びをいただいたのです。

「不信と絶望にとれられてしまったトマスの心がひらかれるのは、彼が、イエスの十字架の傷跡にふれる時です。十字架の中に、トマスに対する無限の愛があり、復活したイエスの中に、永遠の生命があるということを体験した時、トマスの心は懷疑から信頼へ、そして絶望から希望へ転換したのです。こうしたトマスの救いは、イエスを直接見ることができない私たちに、イエスが私たちの救いであるという事実を、確信させるものとなったのです。

『見ずして、信じる者はさいわいである』という祝福を、わたしたちに与えてくれるものとなったのです。」③

視覚障害で見ることができなかった石松牧師は、イエス・キリストの十字架の無限の愛と復活のイエスの中に命を得たとき祝福と勇気をもって踏み出されたのです。こう言い切るのです。「私は自分の盲目に対して、第二に感謝してよいことは特別の愛と同情とを受けているという事

である。私から他人の愛と同情とをのぞいたら私は何事をもなすことはできない。私がこれまで積んできた神の仕事、それは私自身の力の累計ではなく、私が受けた愛と同情との累計であった」。神の無限の愛に支えられた感謝と隣人の愛に支えられた感謝を生きるのです。神の恩寵の信仰に生きたのです。恩寵に生きた石松量蔵の影響を受けた「神の痛み神学」の世界的神学者となった北森嘉蔵牧師は、「私は今や初めて単なる『神』の摂理への信仰ではなく、「キリストの恩恵」への信仰にいれられるにいたったのである。この年の8月19日、熊本水道町のルーテル教会において石松量蔵牧師より洗礼を受けた」と記しています。④ルターは、「信仰とは、我々の内に働く神の業であり、かつそうした神の恵みの業に対する我々の確固たる確信だ」というように信じるとは神の恵み、無限の愛を受けることです。「見ないのに信じる人は、幸いである。」という事はこの事を伝えたいのです。神の恩恵、恩寵、無限の愛を信じた者は、また隣人の愛と同情に感謝し、愛の人として変えられていくのです。北森先生は「私はこの前後に熊本市内の大抵の教会に出席していたようである。初めの内はどこの教会と決めることができなかった。しかし、もっとも心が惹かれたのは水道町にあったルーテル教会であった。そこに石松量蔵牧師からは、なんともいえない温かいものを受け取った」と回顧しています。「見ないのに信じる人は、幸いである。」という者は恵みを運ぶ者とされるのです。

私たちは、今、世界が見えない中を生きています。あきらめと絶望の中を生き、希望を持たないのではなんでしょうか。蹲り、幽かな光も感じる事の出来ない、魔の唸り声をあげたくなり、夜がいつ明けそうもないところを生きています。しかし、必ずイエスさまはここに来て下さり、無限の愛をくださいます。トマスを懷疑から信頼へ、絶望から希望へと導いてくださった復活の主が私たちに寄添って、一步を踏み出すことの出来るようにしてくださいます。神の無限の恩寵、愛を信じましょう。いや、イエス・キリストを信じることこそ、無限の愛に包まれるのです。「盲目であるがゆえに私が何事もなし得なかつたとしたら、私は敗北者の汚名を甘受するに値する。しかし、私にはなお神が弓と矢とを与えたもう。この矢と、これを与えたもうた神とを信じて、私はなお戦いを続ける。そしてやがて斃(たお)れるときには、真に生きがいがあったと思ひ

たいものである。」⑤

引用:①③(「神のやさしの中で」森一弘補佐司教、女子パウロ会)②⑤「盲目の恩寵」石松量蔵、自費出版④「聖書入門」北森嘉蔵、書院ぐろりあ)

牧師室の小窓からのぞいてみると



「どんな危機も、よい知らせを秘めています。それを聞くには、心の耳を澄まして、聴くことを知らねばなりません。」

教皇フランシスコの言葉。

政治、社会の大変動が起きている終末の時代から教皇の言葉は沁みてきませんか。

園長・瞑想？迷走記



私は、落語と銭湯が好きである。時間があれば、寄席か銭湯に寄り降りて、銀座の銭湯に寄った。またその帰りに東京駅に戻り、本屋に寄ると「人生を味合う 古典落語の名文句」という立川談慶さんの一冊の本を見つけた。

なかなか含蓄のある面白い本である。落語にはよく子どもが出てくる。「子別れ」という噺の紹介の文で、「つまり『子育て』とは『プログラム』であり、両親をはじめ過去に繋がった方々へ感謝する『再チャレンジ』なのだ。」という言葉に出会った。家にはお金がなかったが、自分が欲しいという本は、買ってくれた。病弱な私が病気をしたとき、父が私をおんぶして何軒も病院を訪ねてくれたことを思い出す。次の日、父は会社があったはずだと今になれば思える。そんな時、父に手を合わせても、父はもういない。感謝するには遅すぎたと反省するばかりである。

「両親をはじめ過去に繋がった方々へ感謝する『再チャレンジ』なのだ。」という言葉に頷いている。子育ての色々な場面で、母を、父を思い出し感謝している。その感謝の再チャレンジとして、感謝を父、母へ返す気持で、私は二人の子どもを育ててきたようである。長男も、次男も自分の道を見つけるために大学を2回出ている。「大学に入りなおしたい」と言われたとき、貧しい中でも本を買ってくれた父を思い出し、ここは、両親への恩返しだと思い、二人の願いを受け入れた。

「因果は巡るが子育てなのかもと悟り、やはり『親のほうで育てられているな』と白旗を揚げた次第である」という言葉に頷きつつ、子供と向かい合ってきた次第である。

日毎の糧

ハレルヤ。聖所で神を賛美せよ。大空の砦で神を
賛美せよ。

詩篇150：1



ルターの言葉から

試練がある。これは試金石である。それはあなたがたに 神のみ
言葉が、いかに正しく、いかに真実で、いかに甘く、いかに愛すべ
きで、いかに力強く、いかに慰めにみちたもので、それは至高の智恵であ
ることを知らせ、理解させるばかりか、そのことを体得させるのである。

【ドイツ語で書かれたルターの最初の文章のための序文より】

『ルターのことば』宝珠山幸郎訳 聖文舎

初めも終わりもハレルヤ

「イスラエルにとって、そしてキリスト者にとって、生の全
体、その最も些細な部分もすべてを、神のみ前に持ち出すことが
讚美であり、喜びのときも苦難のときもヤーウェと共に、キリス
トと共に歩むことが賛美であり、それを表現し続けたのが詩編で
ある」（「新共同訳 旧約聖書注解Ⅱ」 太田道子 日本
基督教団出版局）それゆえに結びの詩篇150は、ハレルヤ（「主
を讚美せよ」、「主に栄光あれ」）讚美で結ばれています。

私たちの人生も色々とあります。どの人の人生もきっと私小説
ができるでしょうね。しかし、どんな人生の喜びのときも苦難の
ときもヤーウェと共に、キリストと共に歩んだということです
ね。それが150篇の詩篇が私たちに教えてくれているんです。

東京のホームドクター、久留米でかかった医者が肝臓の部分の
異常を見つけ、検査をしています結論がでていません。そんな
時が過ぎる間、自分の人生を振り返るとまずは主・イエス・キリ
ストとお出会い出来たことで道がひらかれたということに気付き
ました。喜びのときも苦難のときもありました。そして、一つ一
つ人生の時を慈しんでいます。そして、「息あるものはこぞって
主を讚美をせよ。 ハレルヤ」という詩篇の最後の言葉に「ア
ーメン」と言えます。

祈り：主よ、喜びのときも苦難のとき、あなたがたが共にいてく
ださり、ハレルヤと讚美できますことを感謝します。

甘木通信

教皇フランシスコ

22日に尊敬している教皇フランシスコが召天されショックを受ける。この激変の時代だから生きて、もっと世界を導いていただきたかった。



昨年、尊敬する森一弘補佐主教も天に帰られ、道をどう生きれば良いかと迷っている時だったので深淵に落とされた気持ちになっている。森司祭の本に「教皇フランシスコの『いのちの言葉』扶桑社」という本がある。

そこで教皇フランシスコが「憐れみ」を強く強調し繰り返し口にすることに二つの理由があると森司祭は言われます。

①「一つは、人間は限りなく弱く脆い存在です。だからこそ、わたしたちに互いに心のやさしい持ち主になって助け合っしてほしいと願うからです。」②「そして、教皇が神の憐れみを強調するもう一つの理由は、人間の努力・工夫では解決できない悲しみや苦しみに覆われてしまうことがあるからです。」

「その上で、神がその闇を包み込み、あたため、癒し、究極の支えとなることを、わたしたちに示そうとするのです。神が厳しい存在ではなく、人間の労苦と重荷を背負うために柔和な愛そのものであることを、必死になって世界の人びとに伝えようとしているのです。……教皇フランシスコの言動からわたしたちの心に伝わってくるものは、人間一人ひとり、神からいただいた、かけがえのない尊い存在であるという信念です」

今の悪魔に支配されたエゴの世界だからこそ、たとえ明日が終わりであっても神の憐れみに生き、神の憐れみを伝えていく主の僕でありたい。

(甘木日記)土) 復活日の準備を信徒さんがしてくださる。感謝。甘木泊。日) 早朝礼拝、子どもイースター礼拝、松崎保育園の職員と一緒に礼拝、祝会と楽しくイースターを祝う。ここまで協力して下さった方がお疲れではと心配。楽しい時間。月) 幼稚園の開始。いつものように早く出て掃除、園児を迎える。月曜日礼拝(イースター)火) 日よけテントを卒園生の保護者に張っていただく。水) 復活した保護者会総会、職員会議、5月の「園だより」と気づくと20時を越していた。木) 朝から甘木教会と松崎保育園のイースター礼拝。園庭開放に一家族。金) 英語、タガログ語の「園だより」を完成。朝は園外保育へ出た幼稚園の留守番。

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。ぐちらない聖人（牧師）もいます。



土）復活日の前日、検査結果を聞きに病院に行ったが、結論は来週になる。医師に素晴らしい病院建物のことを話すと建築がお好きだと聞く。「設計者にお話をしておきます。喜ぶでしょう」と。こういう会話ができる医者との出会いは幸せである。用事をすませせ、甘木へ。すでに信徒

の皆さんが復活祭の準備をさせていただいてく
(久留米つつじ?) さっている。天気が気になる。胃も段々と良くなっている。お医者へのケアのおかげ。日）主の復活日早朝礼拝、子どもイースター礼拝と卵探しを久しぶりに開催、親子30名ばかりが参加される。こういうことを地道に続けていこう。みんなで作ったちらし寿司、おすまし、鳥肉ママレード煮、サラダ、お手製のお菓子、福岡の(隠したイースター卵)イチゴと食卓を彩る。松崎保育園の職員も参加して賑やかな礼拝、祝会となった。イースター卵を近所の方、隣のお寺さんにも届ける。月）仕事の時間をみて、検査結果を聞きに行くが、結局は判断がつかず、再検査となる。こういうこともあるだろう。もしものことがあるといけないので長男にもしものことがあったときの確認をする。「たとえ明日が終わりであっても今日、りんごの苗を植える」という気持ちが分かる。そんなとき慕う教皇フランシスコが召天報を聞く。火）卒園生の保護者に助けられて日よけを張る。途中、雨で一点を残す。明日の保護者会総会の準備。帰り際にウサギの新居を職員に作っていただく。手際が良い。工作が下手くそで組み立ても苦手はこの歳になっても治らない。再検査の日程を決める。水）4時半から主日の準備をし、幼稚園。一年ぶりに再会した保護者会総会、保護者も協力をくださりホッとしている。職員会議、5月の「園だより」と気づくと20時を越していた。そんな中で次の肝臓検査のために紹介状を病院に取りに行く。帰りにいつも朝の挨拶をする方と会い、よもやま話。こういうのが至福。木）今日は甘木教会、松崎保育園に朝から出かける。主の復活についてストレートに子どもに話すのは難しく、いつも悪戦苦闘。聖和幼稚園の園庭開放に一家族が遊びにきてくださる。嬉しいひと時。藤棚に白の藤の花。美しい。金）2時に起きて、英語、タガログ語の「園だより」を作成。気づくと5時。幼稚園に行き、鯉のぼりを卒園生のお祖父ちゃんと上げる。空を泳いでいる。園外保育に出たので留守番。午後から再度CT検査。結果は出るが、診断の結論が出ず。こういうこともあるんだと楽しんでる自分がある。

